

「孟子」の分業論試論

——中国古代における分業論の二つの類型——

岡 本 光 生

# 「孟子」の分業論試論

——中国古代における分業論の二つの類型——

岡 本 光 生

## 問題の提起

私は、かつて墨家において、男は耕し女は紡ぐ、という性の相違による分業は論じられてはいるものの、農、工、商の三者を取り上げての分業、農業と工業（手工業）との分離と両者を媒介する存在、すなわち商業とかかわる分業については言及されてはいないことを、たとえば「墨子」非樂上篇に

王公大人、つとに朝しおそく退き、獄を聴き政を治む。これその分事なり。士君子、股肱の力を竭し、その思慮の智を盡し、内は官府を治め、外は関市山林沢梁の利を収斂し、以て倉廩府庫を実す。これその分事なり。農夫、つとに出て暮に入り、耕稼樹芸して、多く叔粟を聚む。これその分事なり。婦人、つとに興き夜に寐ね、紡績織紵して、多く麻糸葛緒を治め、布練を紵る。これその分事なり。

とある記述に基づきつつ確認した。男は耕し女は紡ぐ、という家族という形式で一体化し、生産に他者の労働の介入を必要としない農民にとって、たとえば「商」という他者の存在は不要であるのも当然だろう。この確認をふまえ、にもかかわらず墨家において財の交換が、たとえば「兼相愛交相利」という形式で構想されていることが、問題となることを論じた<sup>①</sup>。そのさい、墨家との対比において「孟子」の分業にかかわる言説にも少しく触れたが、小稿では、もっぱら「孟子」の分業論を中心的問題として取り上げ、論じていきたい。孟子の分業論について具体的に論じる前に本稿においてしばしば問題となる「商」なる語が、交易にかかわる概念として用いられることについて少しく触れておきたい。

「商」なる語が、そのような語として用いられること

については、亡国の殷民、すなわち「商」人が亡国の後、交易に従事したがゆえに「商」がそのような意味を持つようになったとの説もあるが、その説は根拠に乏しい。「商」には「賞」の意があり、代償、償贖のために「賞」が行われるようになり、のちにそのことが形式化して、商行為を意味するものになった、と考えるのが妥当であろう。あるいは「商」の原義、「はかる」の意から二つのものの価値を比べてはかる、さらに「交換する」という意味を含むようになったのかもしれない。<sup>②</sup>

① 拙稿『『墨子』における財の交換』（『東洋の思想と宗教』第九号 一九九二年）。

② 「商人」の概念を亡国の殷民とのかかわりで把握する考え方を小島祐馬が「原商」（『東亞経済研究』二〇一三 一九三六年）で示し、『漢字語源辞典』（藤

堂明保 学生社 一九六五年）三四三ページにもそうした説明が見られる。こうした考え方への批判を、徐復観『封建政治社会的崩潰及典型専制政治的成立 第三章在封建社会解体中、国人階層的發展』（一）『商』義探源が述べている（同氏著『周秦漢

政治社会結構之研究」所収 学生書局 一九七四年）。本文中に述べた解釈については、白川静「字統」（平凡社 一九八四年）を参照した。

### 孟子の分業論

周知のように「孟子」滕文公上篇には、「神農の言」を奉ずる許行の徒、陳相と孟子との対話が以下のよう

に記されている。少し長いが、引用する（Aとする）。  
神農の言を為す者に許行なるもの有り。楚より滕に之き、門に踵して文公に告げて曰く「遠方の人、君、仁政を行うを聞く。願くば一廬を受けて氓と為らん。」文公、これに処を與う。その徒数十人、みな褐を衣、屨を捆り、席を織り以て食を為す。

陳良の徒陳相、その弟辛とともに耒耜を負い、宋より滕に之き、曰く「君、聖人の政を行うと聞く。これ亦聖人なり。願くば聖人の氓と為らん。」陳相、許行に見えて大いに悦び、ことごとくその学を棄てて学ぶ。

陳相、孟子に見え、許行の言を道いて曰く「滕君、則ち誠に賢君なり。しかりと雖もいまだ道を聞かざるなり。賢者は民とともに並耕して食し、糗飧して

治む。今、滕に倉廩府庫有り。則ちこれ民に厲りて以て自ら養うなり。悪んぞ賢なるを得ん。」

孟子曰く「許子、必ず粟を種えてしかる後食するか。」

〔陳相〕曰く「然り。」

〔孟子〕曰く「許子、必ず布を織りてしかる後に衣するか。」

〔陳相〕曰く「否。許子、褐を衣る。」

〔孟子〕曰く「許子、冠するか。」

〔陳相〕曰く「冠す。」

〔孟子〕曰く「なにをか冠す。」

〔陳相〕曰く「素を冠す。」

〔孟子〕曰く「自らこれを織るか。」

〔陳相〕曰く「否。粟を以てこれに易う。」

〔孟子〕曰く「許子、なんすれぞ自ら織らざる。」

〔陳相〕曰く「耕に害あればなり。」

〔孟子〕曰く「許子、釜甑を以て爨ぎ、鉄を以て耕すか。」

〔陳相〕曰く「然り。」

〔孟子〕曰く「自らこれを為すか。」

〔陳相〕曰く「否。粟を以てこれに易う。」

〔孟子〕曰く「粟を以て械器に易うことを、陶冶に厲るとなさざれば、陶冶の亦その械器を以て粟に易うすることも、あに農夫に厲るとなさんや。かつ許子、なんぞ陶冶を為さざる。みなこれをその宮中に取りて用いずして、なんすれぞ紛紛然として百工と交易する。なんぞや許子の煩を憚らざるは。」

〔陳相〕曰く「百工の事、もとより耕しかつ為すべからざればなり。」

〔孟子〕曰く「然らば則ち天下を治むることのみ、ひとり耕しかつ為すべけんや。……かつ一人の身にして百工の為す所備わる。もし必ず自ら為りて後これを用いんとするは、これ、天下を率いて路（疲）れしむるなり、故に曰く『或るものは心を勞し、或るものは力を勞す。』と。心を勞するものは人を治め、力を勞するものは人に治めらる。人に治めらるるものは人を食い、人を治むるものは人に食わる、天下の通義なり。」

とあるのがそれである。

この對話において、孟子は自給自足を主張する陳相に反論しつつ、陳相自身の口から「粟を以てこれ（鉄製農具）に易う」という言を引き出している。相互の

生産物の交換が「農」と「工」との間に行われている、「農」の側から言えば、その生産活動に「工」の手になる生産物が介入している、というのである。さらに、そうした分業の必然性についてやはり陳相自身の口から「農と工とを兼ねることは、耕すに害がある」、「百工の事、もとより耕しかつ為すべからざればなり」と言わせている。

以上の記述によれば、「農」と「工」との生産物の相互交換は必然なのであるが、ここで注意したいことは、相互の交換を媒介する存在への言及のないことである。すなわちここで交換にかかわつての貨幣の問題は触れられていないし、「農」・「工」とは区別された、もっぱら交換にたずさわる存在もそこには言及されてはいない。

「農」と「工」との間での生産物の相互交換という問題に関しては、「孟子」滕文公下篇に次のような記述も見える（Bとする）。

子、功を通じ事を易え、羨を以て不足を補わざれば、則ち農に余粟あらん、女に余布あらん。子、もしこれを通さば、則ち梓匠輪輿、みな子に食を得ん。「農に余粟あらん、女に余布あらん」という句は、農民

家族の男女間に見られる性別の分業、すなわち自然的分業を指すであろうが、ここでは、そうした農民と「梓匠・輪輿」、すなわち建具屋、大工、車輪工、車台工との間を媒介して「功を通じ事を易え、羨を以て不足を補う」機能が、「子」の機能として確認されている。「農」と「工」とは区別された第三者が「農」と「工」との間を媒介することによって、食糧を直接には生産しない「梓匠輪輿」もはじめて「食を得」というのである。その意味で、ここでの「子」、第三者の果たす機能は「商」のそれとして考えることが可能であり、孟子がここで「商人」の存在を仮定しているとする考えもあろう。しかし、ここにおいて注意しなければならないことは、以下の事柄である。われわれ自身の側で、論理的に「子」、第三者が「商」だと想定可能であつても、「孟子」それ自体の記述には「子は商の機能を果たすのだ」との言説、換言すれば、「農」と「工」との間で両者を媒介する機能を一般的形式において、たとえば「商」として認識することが存在しないということである。

A・Bにおいて、「農」と「工」とは相互に相手の存在が不可欠である、との認識がみられた。とくにBの

記述においては、「農」と「工」との接触を媒介する存在在までが言及されている。しかし、その存在を「農」と「工」とから区別された存在として、一般的な形式において認識してはいないのである。

このようにA・Bにおいては「商」の認識がみられないのであるが、しかし孟子が「商」についての認識を全く欠落させていたわけではない。たとえば梁惠王上篇の次の記述を見よう（Cとする）。

今、王、政を発し仁を施さば、天下の仕うるものをして、みな王の朝に立たんと欲せしめ、耕すものをしてみな王の野に耕さんと欲せしめ、商賈をしてみな王の市に蔵せんと欲せしめ、行旅をしてみな王の塗に出でんと欲せしめ、天下のその君を疾むものをしてみな王に赴き懇えんと欲せしめん。もしかのごとくんば、たれかよくこれを禦めん。

ここでは「天下の仕うるもの」、「耕すもの」と並んで「商賈」、「行旅」が取り上げられ、仁政を施す王のものとへ、それぞれが他国から移動してくるとされる。「商賈」、「行旅」が「天下の仕うるもの」、「耕すもの」と並んで同等に取扱われているのであるが、さらに注意したいことは、「耕すもの」、すなわち農民、常識的に

は土地に束縛され、「移動の自由」をもたないと想定される農民が移動し得る、とされていることである。孟子にあって、農民が「移動の自由」を持つとされるのは、すでに見たところであるが、滕文公上篇に「陳良の徒陳相、その弟辛とともに耒耜を負い、宋より滕に之く。」あるいは滕文公下篇に「士の仕うるは、なお農夫の耕すがごとし。農夫、あにその疆を出ずるがために、その耒耜を捨てんや。」とあることによっても明らかである。農民についてこうした「移動の自由」が構想されるのは、あるいは「耕すもの」の存在様態を「商賈」、「行旅」の存在様態からの類推において把握していたからかもしれない。

同様の発想は公孫丑上篇の次の箇所にもみられる（Dとする）。

賢を尊び能を使い、俊傑位に在れば、則ち天下の士、みな悦びてその朝に立たんことを願う。市、麀にして征せざれば、則ち天下の商、みな悦びてその市に蔵せんことを願う。関、讒ふれども征せざれば、則ち天下の旅、みな悦びてその路に出でんことを願う。耕すもの、助して悦せざれば、則ち天下の農、みな悦びてその野に耕さんことを願う。麀、夫里の

布無ければ、則ち天下の民、これが氓とならんことを願う。まことによくこの五者を行わば、則ち隣国の民、これを仰ぐこと父母のごとし。その子弟を率いて、その父母を攻めるは、生民有りてより以来、いまだよく済すもの有らざるなり。かくのごとければ、則ち天下に敵無し。天下に敵無きもの、天吏なり。しかりしこうして王たらざるもの、いまだこれ有らざるなり。

ここでも「士」「商」「旅」<sup>③</sup>「農」「民」がそれぞれに「移動の自由」を持つ存在として取り上げられ、「この五者」を行う者（王）のもとへ移動するのだとされる。ここで「旅」と「民」とは分業論的観点からの分類とは言えず、その観点からすれば、結局国は、「仁政」を施す王のもとで、同等の地位を持つ三者、すなわち「士」「商」「農」から構成されることになる。しかるに注意しなければならぬことの一つは、C・Dの記述において「工」の存在と機能への言及のないことである。このことは、孟子において「工」は「移動の自由」を持たない、その意味で「農」や「商」とは「王」との関係において質を異にするのではないか、隷属度のきわめて強い関係にあるのではないか、ということを示

唆するのではなからうか。梁惠王上篇の次の記述

孟子、齊の宣王に謂いて曰く「巨室を為らんとせば、則ち必ず工師をして大木を求めしむ。工師大木を得ば、則ち王喜びて以てよくその任に勝えたりとなさん。匠人斲りてこれを小さくせば、則ち王怒りて以てその任に勝えずとなさん。……今、ここに璞玉あらんに、万鎰なりと雖も、必ず玉人をしてこれを彫琢せしめん。

は、一面において「工」の「専門性」の強調であるとともに、<sup>④</sup>「工」が王の管理下にあることをも示しているといえ、上述の想定とも関連しよう。しかし、A・Bの「工」は「農」は、たとえば粟と鉄製農具とを交易する存在であって、その意味では王に隷属してはおらず、それから独立している存在である。とすれば孟子の言う「工」は、「王」に隷属しているか、それともそこから自由で「農」と直接にかかわるのかを基準にして二つのカテゴリーに分類できるのではなからうか。C・Dにおいて、「農」「商」への言及はあるものの「工」への言及がないとすれば、王の「仁政」のもとで「農」の再生産は自己完結性を帯びており、他者、たとえば「工」に依存することなくして成立すること

になろう。そしてまた「農」のみ存在して、「工」が存在しないとするれば、「商」はいかなる二者を媒介するのであろうか、そもそも媒介すべき二端のうちの一端が欠如しているのではないか、従って「商」の機能の必要とされる理由はないのではないか、「商」の存在根拠それ自体がないのではないか、そのようにも考えられるのである。「商」の存在根拠が欠如しているとすれば、上引の二箇所において、たんに「土」「農」「商」が並列的に言及されているのみで、たとえば「農」の再生産にとつての「商」の存在の必然性、換言すれば「農」と「商」との相互関連が説かれていないことも当然であらう。C・Dの箇所において「農」と「商」とは王の「仁政」のもとにあつて統合されているのであつて、「農」の生産のあり方それ自体のうちに内在する理由から「商」の存在を必要とし、それと相互関係を結び、統合されているのではない。それと対比して、A・Bにおいて「農」と「工」とのかかわりそれ自体には「王」の介入のないことは注意されなければならないであらう。

以上考察してきたところによれば、孟子の分業論には二つの類型の存在することが明らかになった。第一

のそれは、A・Bにみられるように「農」と「工」とが生産物を交換することによって相互に関連する、自己の再生産にとつて相手の存在が不可欠である、との認識を示す分業論、ただしそこには「農」と「工」とを媒介する機能への認識が一般的形式にまで高められておらず、たとえば「商」なる概念（この「商」の概念は後述する第二の類型の分業論における「商」の概念、「工」の概念を欠如させ、他者との関わりを必要としない「商」の概念、とは異なるはずである）はいまだ発見されていないのである。

第二のそれは、C・Dにみられるように王の「仁政」のもとで「農」と「商」と「土」とが、相互に関連を持たず、無媒介に並存している分業論である。しかもこの分業論は「工」への認識を欠如させているのであり、「農」の生産のあり方は自己完結的なのである。従つて論理的に言えば、「商」の存在の必然性はないのである。とすれば、孟子の分業論において、第一のそれと第二のそれとは、たがいに関連してはいない、以上のように考えざるを得ない。

ところで、二つの異なるタイプの分業論が「孟子」に並存していることをいかに考えたらよいのか、ここ



でこのことに少し触れてみたい。このことについてはA・B・C・D、それぞれの対話のなされた背景、地域の文化差を考慮すれば、ある程度理解できるであろう。すなわち、Aは小国滕を背景にして行われた陳相との対話であり、Bも滕文公下篇にみられる記述であることからすれば、対話内容はともに滕の事情を反映したものではなからうか。一方C・Dのうち、Cは、孟子と斉の宣王との対話、Dは斉の人、公孫丑にかかわる篇中の記述であり、C・Dの対話内容はともに大國斉の事情を反映したものであると考えられよう。すなわち、「孟子」のうちに二つの事なる分業論が並存しているのは、それぞれの対話のなされた場、滕と斉との経済の発展度合いの差異をも含めた文化差に起因すると考えられよう。<sup>⑤</sup>

① 全漢昇「中古自然經濟」（中央研究院歷史言語研究所集刊第十 一九四一年）にそのような指摘がある。

② 王興業「管仲対孟子經濟思想的影響」（「管子研究」第一輯所収 山東人民出版社 一九八七年）の八〇ページに「『子』指学生彭更、在這里假定為商人」とある。

③ 小倉芳彦「諸子百家論」（講座世界歴史古代四所収 岩波書店 一九七〇年）の二〇〇ページにみえるように、「旅」「行旅」については、修辭上の理由から「商」を「商」と「旅」とに分けたと理解できよう。また王興業は、前掲論文七九ページで「旅」「行旅」を「過路的商人」と解釈している。

④ この指摘は石母田正「古代社会と手工業の成立」（同氏著「日本古代国家論第一部」 岩波書店 一九七三年）の四一―ページに見える。

⑤ 前掲拙稿では、分業論にかかわる孟子の多様な言説を統一的に解釈しようと試みた。しかし、そうした言説のなされた「場」を考慮に入れると、統一的に解釈しようという指向には問題がありそうである。

### 分業論の二つの類型

以上、孟子の分業論を分析してきたが、そこに二つの異なる類型のあることが明らかになった。他の思想文獻にみられる分業論を分析するさいの手掛かりとして用いるべく、この二つの類型について、より一般的な形に定式化しておきたい。

分化された各部分が相互に関係する、それぞれの再

生産にとって、他の部分の介入が不可欠である、という内容を言説のうちに含む分業論、たとえばその言説のうちに「農」と「工」との相互関連・交易についての議論のある分業論、第一のタイプの分業論として以上のごとき分業論がある。このタイプの議論において、「商」が部分の一つとして挙げられているか否かは、とりあえず問題ではない。問題にすべきは、各部分それ自体の生産活動に他の部分の生産活動の介入が、必要不可欠か否か、なのである。

第二のタイプの分業論は以下のごときものである。

分化された各部分が列挙されている。ただし、分化された各部分が、互いに相互の存在を必要不可欠としていることへの言及、換言すれば、各部分の有機的結合についての言及はないのである。他の部分の存在を前提とせず、それらとのつながりなしにそれぞれの部分は自己完結的に孤立化して存在する。従ってこのタイプの分業論において、たとえば「工」が語られずして「商」が語られているとしてもそこには何の問題もない。「商」は、ただ「ある」のであって、その存在根拠が他の部分とのかかわりにおいて問われることはないからである。同様に「工」が語られていないことも

また何の問題でもない。「工」はただ「ない」のであって、それが「なく」とも、他の部分に何の影響も及ぼさないからである。

このタイプの分業論の典型として、「管子」小匡篇の以下の記述を挙げよう。

桓公曰く「民の居を定め、民の事を成すこと、い  
かん。」

管子対えて曰く「士農工商の四民は、国の石民なり。雑処せしむべからず。雑処すれば、則ちその言は𪔐、その事は乱る。是の故に、聖王の士を処するや、必ず閭閻に就かしめ、農を処するや、必ず田野に就かしめ、工を処するや、必ず官府に就かしめ、商を処するや、必ず市井に就かしむ。」

ここは「士」「農」「工」「商」の四民が「国の石民」としてあげられている。しかし、この四者は互いに雑処してはならず、互いに隔離されてはいなければならぬのである。つまり、ここには、四民の相互関係が語られておらず、四民のそれぞれは各個に直接に「聖王」と結合するのである。

第一のタイプの分業論について、孟子の分業論以外にも例を挙げておきたい。時代ははるかに後になるが、

「塩鉄論」の御史大夫は、本議篇に以下のように述べる。

大夫曰く「古の国家を立つるもの、本末の途を開き、有無の用を通ず。市・朝以てその求めを一にし、市民を致し、万貨を聚め、農工商の師、おのおの欲する所を得、交易して退く。易に曰く『その交を通じ、民をして倦ましむ。』と。故に工出さざれば、則ち農用乖く。商出さざれば、則ち宝貨絶ゆ。農用乏しければ、則ち穀殖えず。宝貨絶ゆれば、則ち財用匱し。故に塩鉄・均輪は、委財を通じて緩急を調うる所以なり。これを罷むるは便ならず。」

あるいはまた水旱篇に

大夫曰く「今、県官農器を鑄し、民をして本を務め、末を営まざらしむれば、則ち饑寒の累なし。塩鉄何の害あつて罷めん。」

とも述べる。

ここに見られる御史大夫の認識は、以下のごときものである。

農業生産（「本」）にとつて鉄製農具は必要にして不可欠である。しかしそれは、農民自身によつて生産されるものではなく、「工」ないし「県官」の手になり、

「商」ないし「県官」それ自身の媒介を経て、農民にわたる、このような認識である。「農」の生産活動は、自己完結的になされるのではない、それは他者の生産活動の成果の介入を待つてはじめて完結する、というのである。「農」の生産活動についてのこのように認識するのは、「塩鉄論」において、御史大夫の側ばかりではない。かれらと対立する文学・賢良の徒の側もまた、そうした認識を示すのである。文学にあつては「鉄器なるもの、農夫の死士なり」（禁耕）と述べ、さらに賢良は水旱篇に以下のように述べる。

農、天下の大業なり。鉄器、民の大用なり。器用便利なれば、則ち力を用うること少なくて作を得ること多く、農夫、事を楽しみ功を勤む。用具わらざれば、則ち田疇荒れて、穀殖えず、力を用うること鮮くして、功、おのずから半なり。器、便と不便と、その功たがい十にして倍するなり。

さらに

（もし、鉄器の製造流通を国家統制ではなく民間の自由にまかせれば）家人相一し、父子力を戮せ、おのおの努めて善器をつくる。器の善からざるもの、農事を集（成）さざればなり。急（故）か？）に軌

運してこれを阡陌の間に衍ぐれば、民、相与に市買し、財貨・五穀を以て、新と弊とを易貿し、あるいはときに貰するを得れば、民、作業を棄て、田器を置かずして、おのおの欲する所を得て、更繇省約せらる。

とも言い、また

古、千室の邑、百乘の家、陶冶工商、四民の求めは、以て相更うるに足れり。故に農民は畦畝を離れずして、田器に足り、工人は斬伐せずして、材木に足り、陶冶は田を耕さずして、粟米に足る。百姓おのおのその便を得て、上に事なし。

として、農民にとっての「大用」にして「決死の士」である鉄製農具は、他者によって製造され、農民はそれを交易によって入手する、とする。

このように見てくれば、「農」の生産活動にとって、鉄製農具は他者によって製造されるものであって、生産過程に他者の介入があつて、はじめて「農」の生産活動は可能なのだ、文学・賢良の徒もまた以上のように認識していたことは明らかであろう。

「塩鉄論」の論争の当事者たちが、農民と鉄製農具との関連についてこうした認識を抱いていた以上、そこ

に見られる分業論は、明らかに第一の類型に属するものである。

#### おわりに

小稿は、まず孟子の分業論について分析し、そこに二つの類型のあることを論じた。さらに、戦国から漢代にかけての分業にかかわる議論を、この二類型をモデルに整理していくことの有効性について、時代性の無視をあえて冒しつつ、「管子」小匡篇及び「塩鉄論」を例に挙げ、論じてみた。その意味で小稿は、あくまで一つの試論であり、たとえば、「管子」に見える抑商論を並存させた分業論を分析するについて、この二類型のモデルは有効に機能し得るのか、「商君書」に見られる重農抑商論と「塩鉄論」禁耕・復古篇の御史大夫の主張にみられる抑商論とを比較しつつ、分析するさいにも、有効性を発揮し得るのか、といった問題も今後に残された課題である。

また、第一の類型の分業論と第二のそれとは、以下に示す二つのタイプの交換と対応しているのではないだろうか。第一は、共同体内部での成員相互の交換、第二は、共同体ないしそれを代表するものと他の共同

体ないしそれを代表するものと間でおこなわれる交換、換言すれば共同体と共同体との境界、それらの接触する場で行われる交換、これら二つのタイプの交換にそれぞれ対応する分業論ではないのか、そうした事柄も考えられてくるのである。

残された課題も多いが、今回はここで筆を置くことにする。

- ① 金谷治「管子の研究」一四五ページ―一四七ページを参照のこと（岩波書店 一九八七年）。

小稿で参考としたテキスト

「墨子」 「墨子問詁」

「孟子」 岩波文庫本

「管子」 新釈漢文大系本

「塩鉄論」 王利器「塩鉄論校注」

山田勝美「塩鉄論」中国古典新書

なお、訓読文は以上のテキストを参考にしつつ、筆者が作成した。